

〈書評〉

菅聡子著

『女が国家を裏切るとき——女学生、一葉、吉屋信子』

(岩波書店 2011年 280頁 ISBN 978-4000224116 2,800円+税)

倉田 容子



本書は、強烈なダブルバインドの書である。明治期の女子教育をめぐる諸言説、樋口一葉の和歌、吉屋信子の小説およびその受容に見られる女性同士の連帯、そして『国体の本義』と、広範な時代と多様な言説領域を横断しながら本書が一貫して追求しているのは、文学的感傷の力、とくに女性表現におけるそれが国家的暴力といかに共謀し、あるいは抗していたのかという点だ。〈感傷〉という言語表象を生み出す文脈のあわいに降り立って国家との共謀・背戻の闘争劇を鮮やかに読み解いていく筆致は、必然的に、読者を〈感傷〉と対峙させ、その抗いがたい物語の魅力を目前に突き付ける。しかし同時に著者は、物語の〈感傷〉性に身を任せ、自己没入のうちに思考停止することを厳しく戒めるのである。

加えて本書が主な分析対象としているのは、これまでフェミニズム批評が槍玉に挙げてきた男同士のホモソーシャルリティや家父長制社会が形作るジェンダー規範ではなく、女性たちがそれらに抗する唯一の手段として模索し紡ぎだしてきた切実なる女性表現である。「不可能性を抱え込みつつ、たまさか、国家的支配関係を無化するような女性たちの関係性が夢想される余地は残っていただろうか」(p.64)。本書全体に通底するこの問いは、問いそれ自体に予め内包された不可能性への予感と、それでもなお抵抗への希望を捨てず、テキストの狭間から漏れ聞こえてくる声に耳をすませようとする強い意志とが読者の心に訴えかけ、〈感傷〉へと誘う。

これらの幾重にも張り巡らされたダブルバインドが戦略的なものであるか否かは評者には知り得ない。だが少なくとも、著者が〈感傷〉性をも含めた物語の魅力を知悉し、自らも深くそれに魅せられた一人であったことは、本書に挙げられた膨大な数の資料・史料、そして和歌や明治期の小説テキストのみならず、少女小説、さらには今日のサブカルチャーをも包含する幅広い射程からも、容易にうかがい知ることができる。また、本書で取り上げられている東京女子高等師範学校（お茶の水女子大学の前身）の事例や、吉屋信子の小説およびその読者との間に形成された女性同士の絆に関する分析は、自らもお茶の水女子大学教員として〈学問〉を通じたシスターフッドの形成に尽力し、研究・教育の両面において多大な功績を残した著者自身の姿を想起せずにはおかない。

すなわち本書は、文学研究の書であるとともに、自伝的フェミニズム批評としての側面を備えている。「女学生、一葉、吉屋信子」という一見すると繋がりが見えにくい副題の意図は、そこにあるのではないか。女子教育、樋口一葉、そしてシスターフッドを形成する少女小説は、いずれも著者にとってライフワークと言える主要な研究テーマであり、おそらくは著者自身を形作る物語に他ならないからだ。

女自身の物語を生み出し、それを手に入れたければ、私たちは、間接的手段を取るべきである。まず、読むという行為の中で、文学、理論、そして自伝をつなぎあわせ、その後、文化というテクス

トの中に、私たちの女性性と、失われた自伝との両方を読み込んでみてはどうだろう。(シヨシャナ・フェルマン／下河辺美知子訳『女が読むとき 女が書くとき——自伝的新フェミニズム批評』勁草書房、1998・12、p.25)

過去あるいは他者の言説を今日的視点から断罪するのではなく、他者の物語を読み、批評理論と注意深く繋ぎ合わせる作業を繰り返しながら、著者は、「失われた自伝」を呼び起こしているように見える。堅牢な家父長制下に密やかに夢想されたシスターフッドにさえ向けられる冷徹な批評眼は、同時に、「物語に何を〈読む〉のかということそれ自体が、私たち自身の欲望の投影である」(p.274)として、著者自身の「欲望」へも容赦なく切り込む刃となる。このエクリチュールが伴う痛みこそ、本書の批評的意義とともに、本書の語りが生み出す〈感傷〉の根幹がある。

各章を概観しよう。本書は三部構成となっており、「Ⅰ 国民化する／される女たち——明治期女子教育の軌跡」では、主に明治二〇年代の小説テキストの分析を通して、「明治日本が国民国家としての自己を形成しようとするなかで、女性たちに対し、どのようなジェンダー配備に基づいた要請が行われたのか」(p.12)が明らかにされている。まず「第一章 学問か器量か——彼女たちの受難」では、小説テキストにおける女子教育の表象から、女子の学問と容貌という記号が形成する文脈と、そうした文脈を女性自らに内面化させる語りの戦略が炙り出される。続く「第二章 「教育勅語」と女学生——東京女子高等師範学校を事例として」では、〈学問する女〉にとって最高学府であった東京女子高等師範学校が、明治天皇皇后美子、教育勅語、日清戦争との連関においていかに国家と連携していったのが考察され、良妻賢母教育を通じた女性の国民化の様態が明らかにされる。さらに「第三章 国家のための女たち——娼妓たちの日清戦争」では、家父長制度から疎外された女性たちを周縁化しつつ同時に搾取する言説構造のレトリックが、主に小説テキストから明らかにされている。

「Ⅱ 女が〈和歌〉を詠むとき——樋口一葉と日清戦争」では、樋口一葉の和歌をとりあげ、明治近代が要請する国民化と一葉歌の言葉の葛藤が前景化される。「第四章 〈女性作家〉と〈国民〉の交差するところ——一葉日記を読む」では、一葉の「国家」に対する関心が和歌に対する意識と並行して醸成されていったことが、一葉日記から検証されている。著者が重視するのは、従来の研究史において高く評価されてきた一葉の個的心情が垣間見られる歌ではなく、むしろ一見平凡で典型的な歌群である。清国艦隊提督・丁汝昌の自死についての一葉歌について、著者は「[かたき]の自死を「哀」という感傷へと変換し、さらにそれが〈和歌〉に収斂するこの発想の型こそ、「われわれ」という共同性の学習において〈和歌〉が果たす機能を示していよう。さらにそれが、あくまで雅な業であり女性性の発露とされる時、女性と〈文〉(言葉)、「国民」という共同性の交差が可視のものとなる」(p.114)と指摘する。「第五章 日清戦争を詠むこと」では、「国民」という共同性との連関がより明確な題詠歌が取り上げられ、和歌という表現形式が自動的に国家ないしは天皇という文脈を呼び寄せる機制のありようが明らかにされる。ここでは主に和歌の「自動的に〈帝国〉と接続してしまう機能」(p.121)が検証されるのだが、著者の批評性が光るのは、むしろ国民化の教化の具としての和歌が「和歌の本質に女性性を見出」(p.131)そうとするジェンダー規範と連結したときに生じる亀裂についての分析である。すなわち「日清戦争」という「題」のもとに一葉が歌を詠むとき、「戦争という事象それ自体が指向する男性性が、伝統的な和歌の「題」と組み合わせられたときには、和歌の持つ女性性が自動的に発動してしまい、

結果として両者の衝突あるいは混交が生じている」(p.140)という。和歌という〈伝統的〉な表現形式に刻印された従順／反抗の不協和音がジェンダーという視点から浮き彫りにされていくプロセスは、本書の中でも最もスリリングな箇所の一つだ。

文学的感傷の力がとくに前景化されるのは「Ⅲ 女の友情、そのゆくえ——吉屋信子と大東亜戦争」である。「第七章 少女たちの絆——『花物語』『女の友情』を読む」では、『花物語』においては女学校や寄宿舎という閉ざされた空間においてのみ成立していた〈女の友情〉——レズビアン連続帯——が、『女の友情』においては卒業後も結婚の如何を問わず継続・強化されながら、しかし最終的には再び現実から乖離した空間へと隔離されることが検証される。続く「第八章 〈女の友情〉のゆくえ——吉屋信子と大東亜戦争」では、本質的に〈感傷〉の共有によって形成されていた〈女の友情〉が、戦時下において国家の言説と共振し、「帝国のフェミニズム」を形成していくさまが『女の教室』の分析を通して明らかにされる。七人の「グループ」たちがそれぞれ障害・困難に直面しながらも「皇后をその頂点かつ中心として、すべてが等しくいわば〈一視同仁〉に再編成された女性たちの精神的共同体」(p.225)を形成していくこの物語は、かつて体制への叛逆の砦であった〈感傷〉を〈皇国〉への奉仕として再編成する内容を持っている。著者は、「愛する者、いたいけな者たちを守るために戦場に赴く——このシンプルな〈感傷〉の物語に、しかし誰が抗うことができようか」(p.232)と問いかけつつも、物語に潜む〈感傷〉の機制を明らかにし、物語に抗する力を見出すことを提案する。そして、「吉屋が思いを馳せた女性同士の絆がその真の意義を発揮するときに、必ず存するはずだ」(p.233)として、不幸にして国家の欲望へと回収された〈女の友情〉が内包していた可能性を掬い上げる。

このように本書は、「女が国家を裏切るとき」よりもむしろ、女たちが国家に絡め取られていく過程に、多くの紙幅を割いている。だがこのタイトルの意図するところは、終章で明らかになる。一葉と吉屋が描いた〈非国民〉としての男性像を分析した「第九章 帝国の〈非国民〉たち」を挟み、「終章 文学的感傷にあらがうために——『国体の本義』を読む」では、『国体の本義』における共同性形成のレトリック、すなわち同語反復や大仰な用語による崇高さの仮構とそれへの自己同一化、そして歌の引用による〈情〉・〈感傷〉の共有についての分析がなされる。『国体の本義』における〈文学〉性を「国家の欲望による〈文学〉の横奪にほかならない」(p.273)としつつも、著者はその横奪の実態が他ならぬ〈文学〉に内在する〈感傷〉性によって隠蔽される事実を指摘し、次のように結ぶ。

だが翻って、外在するかに見える〈暴力〉が実は、私たち自身の内部にこそ存在するものであることを考えるとき、物語に何を〈読む〉のかということそれ自体が、私たち自身の欲望の投影であるとも言える。酒井直樹が述べるように、「『読み』は幻想の創作の作業の性格を強く帯びる」のであるなら、やはり、文学的感傷の力に抗うことそれ自体も、読者の営為、〈読むこと〉に懸けられているに違いない。私たちが〈文学〉を研究し、その戦略を熟知しようと目論むこと。一見、実利的な社会価値においては無為にも思える〈文学〉研究の真意はここに存する。(p.274)

「〈文学〉研究」へと懸けられたこの期待の地平は、やはり〈感傷〉の作用を否応なく伴っている。だが、ここでのそれは、共同性への強制力を伴う物語における〈感傷〉とは、本質的に真逆のベクトルを有する。著者は、いかなる物語であれ、自己没入の快感に身を委ねることを赦さない。『花物語』においては抵抗の意味を持っていた〈感傷〉による絆が、やがて〈皇国〉の大義と共振していったように、

〈感傷〉はそれ自体、常に〈暴力〉へと容易に傾斜する傾向性を内包しているからだ。〈感傷〉が生み出される表現の際に降り立ちながら、〈感傷〉から幾度も身を引き剥がし、著者はその機制のさまを告発し続ける。この身を切るような読書行為を営々と自らに課してきた孤高の批評性が、読むものの心を揺さぶる。すなわち、「国家を裏切る」のは、一葉や吉屋のテキスト以上に、本書の〈読み〉なのだ。

自己同一化の欲望に注意深く抗いながら、隙のない論理展開のあわいに揺らぐ欲望と葛藤の影に目を凝らすとき、本書の読者は、抵抗の方途としての「失われた自伝」が立ち上がる瞬間を目撃する。その証人として私たちが再び物語を語り出すとき初めて、読みの絆は拓かれる。

(くらた・ようこ／杉野服飾大学専任講師)